熊本女子大学郷土文化研究所

― 女子大黎明期の活動と成果が『今』に示唆するもの ―

解説：熊本県立大学文学部講師　大島明秀（歴史学）

熊本女子大学郷土文化研究所史料について

「熊本女子大学郷土文化研究所」の前身である「郷土文化研究所」は、熊本女子大学内に設置された有志による組織で、熊本地域の文化と歴史を研究対象としていました。実際に組織活動が行われていたことは、木製の看板（縦 75,4 ㎝×横 11,6 ㎝×厚さ 2,7㎝）の存在からも窺えます。

その足跡についてはいくつかの記録が残されています。「郷土文化研究所記録」と題された B5 ノートには、当初の構想案および所員の構成などが確認でき、所長は熊本女子大学長であった北村直躬先生が務められました。所員として、熊本大学法文学部原田敏明先生、同松本雅明先生、同森田誠一先生、医学部忽那将愛先生、教育学部杉本尚雄先生、同岩本政教先生、熊本大学理学部福山賢蔵先生、熊本短期大学丸山学先生、同佐々久先生、熊本女子大学の乙益重隆先生および圭室諦成先生、そして白川中学の布村一夫先生といった先生方がその名を連ねています。熊本の錚々たる顔触れによって構成されていることから、郷土文化研究所が高度な水準の学術研究機関として、大学、学派、分野を＜越境＞した雄大な構想のもとにその計画が描かれていたことが分かります。しかし、資金不足などから何年も経たないうちに自然解消になります。

そのような思わしくない動向の中で、前述の北村直躬先生を所長として、乙益重隆先生、圭室諦成先生、布村一夫先生の 4 名で、当初「郷土文化研究所」で描いた企画を少しでも実現することを目指し、「熊本女子大学郷土文化研究所」とその名を改め再出発しました。

さて、上述した「郷土文化研究所記録」には、昭和 25 年 7 月 20 日から昭和 28 年 10 月 2 日に至る、郷土文化研究所設立に至る経緯、正式な大学組織にするための上申書の草案などが記載されており、熊本女子大学郷土文化研究所として新たな船出を果たした後の研究活動も詳細に記録されています。そこに認められる活動の一例として、本学は江戸時代から現在の上益城郡に所在した大庄屋冨永家の民具を女子大時代から所有しているのですが（昭和 36 年 6 月 1 日熊本市立熊本博物館に寄託、平成 20 年度に返還）、つい先日までどのような経緯でそれらが大学に搬入されたのかは全く不明でした。しかし、今回「郷土文化研究所記録」によって冨永家の民具を調査した日時や、大学に搬入された日付などが判明し、現在との繋がりを見出すことができました。

次に、「史料目録」と題された B5 ノートには、昭和 29 年 3 月 25 日から 11 月 14 日の間に、熊本

女子大学郷土文化研究所が熊本のいたるところで調査した600点以上の史料名と調査場所・日程が記されています。

「郷土文化研究所関係書類綴」1式は、複数の郷土文化研究所保存用書類（ガリ版刷り）が綴じられたものです。中身は、事業計画、関係者リスト、規約要綱、『熊本県史料集成』の購買予約書類、昭和26年度から29年度にかけての歳出予算案などです。

その草稿となった書類が収められた「郷土文化研究所草案綴」1式は、手書き原稿や鉛筆などでの修正跡が認められます。「関係書類綴」には見られない、昭和26年に開講を企画していた講座と講師一覧表や、当時の佐藤眞佐男熊本市長に宛てた講師斡旋依頼などの資料も確認できます。

「熊本県史料集成購買者名簿」と題するB5ノート2冊には、会員別、住所別の『熊本県史料集成』購入者リストが記載され、さらに寄贈先リスト、日本談義社への引き継ぎなどが詳細に記されています。

このように熊本女子大学郷土文化研究所は、その設立の経緯や活動を示した記録を事細かに遺しており、現在にその姿を甦らせることができます。

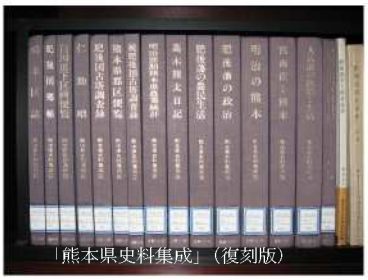
また、本学教員であった上河一之先生が上記史料に基づき、「「熊本女子大学郷土文化研究所」について」（『文学部紀要』第9巻2号、2003年3月、［表紙の論題一部誤り］）で、概要を紹介されています。

熊本女子大学郷土文化研究所および歴史学研究部の活動とその評価

「熊本県史料集成」　第１集～第３集（初版）

『熊本県史料集成』は熊本女子大学郷土文化研究所が築き上げた成果で、昭和27年から32年にかけて全15冊が刊行されています。美しいガリ版刷りで、最も多いもので約400部印刷されたようです。昭和60年には待望の復刻版が全冊刊行され、その序文には熊本女子大学郷土文化研究所の中心メンバーであった乙益重隆先生と、元本学教員であった冨田啓一郎先生の回想が付されました。

『熊本県史料集成』の編纂事業と並行して、熊本女子大学歴史学研究部は、圭室諦成先生および乙益重隆先生の指導のもとで、昭和30年から32年にかけて肥後の農村を追究した三部作『肥後藩の農業構造』、『肥後藩の農村構造』、『肥後藩の経済構造』と、『肥後国郡村誌抄』上・中巻を上梓しています。残念ながらこの時『肥後国郡村誌抄』の下巻は完成に至らなかったようですが、昭和47年になって本学元教員坂口一男先生の監修と宇土高校教諭卯野木盈二先生のもとで、新たな部員の力によって下巻に該当する『肥後国宇土郡村誌抄』が編まれ、さらに続編として『肥後國求麻郡村誌』も上梓されました。


「熊本県史料集成」（復刻版）

「肥後藩の農業構造」ほか

上述の昭和30年刊『肥後藩の農業構造』の凡例には、国文科3年高野玲子、楠田靖、武田和子、家政科4年江上芙佐子、同2年吉井佐紀子、吉田紀子、英文2年坂田依和子といった様々な所属当時の部員の名が原稿執筆者として挙げられています。さらに書籍の末尾には創設二年目に突入したばかりの歴史学研究部員の

名簿が掲載されていますが、国文科から 8 人、家政科は最多の 14 人、英文科からもなんと 6 人参加しており、総勢 28 人の大所帯だったようです。続いて『肥後藩の農村構造』では、原稿作成者として前述の吉井佐紀子および吉田紀子、さらに家政科 2 年本藤矩子、同佐藤たか、同平川浩子、同村上ヒロ子、そして渋谷かえ子の名が記されています。三部作最後の『肥後藩の経済構造』では、前述の本藤矩子、佐藤たか、平川浩子、村上ヒロ子が執筆者となっています。同様に、『肥後国郡村誌抄』上巻では、家政科 4 年佐藤たか、同平川浩子が原稿作成および校正者、同本藤矩子、同村上ヒロ子、同 3 年高木伊都子、同 2 年吉田倫子、高倉幸子、吉村紀久江、国文科 3 年中村楷子、同平野潤子、同 2 年中島ミドリが協力者となっています。中巻では、前述の高倉幸子が原稿作成および校正者となり、家政科 3 年吉田倫子，国文科 3 年中島ミドリ、同 2 年吉川友子、同山辺満寿子、同栄木徳子が協力者として作業にあたったと記されています。

また、『肥後藩の農業構造』は部員江上美佐子が発行人として記載されており、『肥後藩の経済構造』および『肥後国郡村誌抄』上巻については、佐藤たかが発行人となっています。少し時間を経てから編まれた『肥後国宇土郡村誌抄』は、部員杉森貴美代や中馬美子の熱心な依頼からこの事業が始まった旨が記されるとともに、発行人もまた部員の中馬美子となっています。『肥後國求麻郡村誌』では部員平山みどりが発行を担当しています。これら一連の刊行の主役が学生の部活であることは特筆に価する上に、国文科だけでなく多くの家政科や英文科の学生が自己の領域を＜越境＞して、高度な郷土史研究に積極的に参加していた姿には驚嘆させられるとともに、今の私達の在り方について、多くのことを学ばされます。

「肥後国郡村誌抄」ほか

ところで、これらの研究成果には共通して以下のような二つの特徴が見られます。

（1）地元の人間の手によって近世および近代の熊本地域を対象としていること

（2）基礎的史料の翻刻とその解説、ならびに目録作成が中心であること

（1）について言えば、実は郷土史を重視する取り組みは明治から始まっています。例えば、当時の文部省の指針に倣い、熊本では全国の地方に先駆けて、明治 27 年（1894）に辻武雄によって『肥後史談』が執筆され、小学校教科書として用いられています。また、第二次大戦期には大政翼賛運動の中でいわゆる「地方文化運動」が巻き起こりますが、この時「文化」概念が政治的に意味付けされ、「地方」に主役の座が与えられました。つまり、熊本女子大学郷土文化研究所および歴史学研究部の業績は、この郷土を重視する明治 20 年代以降の流れの中に位置付けることができると思います。

ただし、歴史学研究部に所属する様々な分野にわたる女学生が中心となって、郷土史に関する高水準の史料編纂および学術出版事業を自主的に創り上げた＜事実＞があることは、我が大学の最も誇るべき歴史の一つだと思います。

歴史学的な観点からすると、むしろ（2）が画期的な取り組みであったと言えます。歴史叙述を通して明らかになることは、過去ではなくむしろその時々の自己像だと言えるのですが、第二次大戦直後の歴史学は、西洋型近代化の肯定を前提とした上で、敗戦の理由を過去に求めることにその主眼がありました。例えば、江戸時代などは「鎖国」によって西洋を鎖した未開の時代と蔑まれ、

そのために欧米列強の＜発展＞に遅れたのだと位置づけるような歴史観が主流でした。

しかし、熊本女子大学郷土文化研究所や歴史学研究部の業績には全くそういった歴史観は確認できません。熊本地域を知るための必要不可欠な基礎的史料を収集し、同時代および後世の研究者が原文を利用できるように、できるだけ私見を加えず史料翻刻・解説および目録作成に専念したのです。あくまで文献実証主義の立場を崩さず、そのための基礎史料を広く収集、公開することを貫いたその姿勢は、同時代の歴史学からも一歩進んだ取り組みだったと言え、学術的にも、加えて地域貢献の観点からも現在の学問水準に耐えうる取り組みだったと評価できるでしょう。

郷土文化研究所の発会式を伝える
昭和２５年発行の熊本女子大学ニュース
（学生新聞のコーナーでご覧になれます）

今なぜ大学史料なのか――その同時代的意義

初代熊本女子大学長であり、
初代の郷土文化研究所長でも
あった北村直躬氏の胸像
（現在のキャンパスにて）

歴史とは、現在の私達を知り、未来を模索するための一つの鑑と言えますが、（熊本女子大学）郷土文化研究所が築き上げた成果は、今を生きる私達に何を提示し、どのような意味を持つのでしょうか？

現今の＜先進＞諸国は、近代以降強く肯定し推進してきた「資本主義」の弊害に苦しんでいます。搾取による格差を肯定する社会では、経済的な＜豊かさ＞だけが是とされ、富めるものが尊重され、貧しいものは蔑まれます。そしてこの延長線上に、中央重視と地方切り捨ての発想が必然的に生じます。

大江キャンパス正門前（昭和３０年代）

では、そのような日本社会の一地方に生きる私達は、どのように明るい未来を構築していけばよいのでしょうか。その答えに至る一つのヒントが、（熊本女子大学）郷土文化研究所や歴史学研究部の営為と業績に見出せることと思います。すなわち、私達はそこから「資本主義」という言説空間の外側にある＜豊かさ＞を＜再発見＞できるのではないでしょうか。（熊本女子大学）郷土文化研究所や歴史学研究部は、文学、歴史、風土をはじめとする地元熊本の多種多様な＜豊かさ＞を、同時代および後世に遺すべく奮闘し、そしてその想いが時代を越えて今ここに展示されているのだと思います。それは図らずも、貧しい＜豊かさ＞のみを追い求めている現今の日本の在り方を問う鑑ともなっています。

また、諸先生の指導があったとはいえ、学生のクラブ活動である熊本女子大学歴史学研究部が結実させた一連の仕事は、現在でも学問的に高水準と認めうるものであり、そのような成果を学生が自主的に創り上げた確固たる＜事実＞は、自主性、独立心、＜政治＞意識、そして＜アイデンティティ＞の欠乏・喪失が叫ばれる現今の大学生や、全入時代における大学の在り方を考える一つの良い材料となるのではないでしょうか。

彼／彼女らの軌跡は、「日本」というナショナルな単位の一部としての熊本ではなく、熊本からの、そして熊本女子大学からの、そこに生きる個々人からの――まさに今ここからの一人一人の発信なのです。言い換えれば、ここに展示された大学史料群は、今生きているこの場所とその過去を通して、私達に地元の＜豊かさ＞を再確認させながら、どのようにして＜豊かな＞未来を私達の手で構築していけばよいのかを見つめなおさせてくれる＜豊かな＞資源なのです。

このような大学史料の同時代的＜意義＞を理解し、私達自身を、ひいては日本や各地方の在り方を冷静に見つめなおす鑑とするとともに、後世に受け継いでいくべき貴重な財産であることを各人が深く認識する必要があるでしょう。